

< 実践研究報告 > 日本語授業におけるディベート活動の実践報告

著者	阪上 彩子
雑誌名	関西学院大学高等教育研究
号	8
ページ	41-49
発行年	2018-03-23
URL	http://hdl.handle.net/10236/00026897

日本語授業におけるディベート活動の実践報告

阪上彩子 (国際学部)

要旨

本稿は関西学院大学国際学部日本語上級クラスで実施されたディベート活動についての実践報告である。

「ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR)」によると、外国語の上級はC1レベルにあたり、「複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の詳細なテキストを作ることができる」と定義されている。上級の能力を身につけるために、複雑な話題について内容を理解し、根拠を示しながら、相手に分かりやすく意見を主張する練習ができるディベートは有効である。第3者による勝ち負けの判定もあるためゲーム性も高く、学習者のモチベーションも高い。それにチーム内メンバーで協力し、相手チームを論破する必要があるため、21世紀型スキルにもあげられるチームで働く能力を身につけることができる。

本実践では、ディベート本番だけではなく、ディベートの準備、ディベートのふりかえりに時間をかけている。ディベート後の授業は、宿題として出した意見文のピアレスポンスを行い、お互いの意見文にコメントを出し、教え合うことで問題解決のため協働的に行うことを学ぶ。またCALL教室を利用し、ディベート本番で話した自分の日本語をふりかえり、内省する力を養う。またディベート活動での受講生の反応を観察し、受講生の感想から実践活動を考察し、今後の課題を述べる。

1. 本実践の背景

外国語の難易度を定義するのは言語によって特徴があり異なることも多いが、「ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR)」は次のように上級下レベル (C1) を定義している。

「いろいろな種類の高度な内容のかなり長いテキストを理解することができ、含意を把握できる。また、複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の詳細なテキストを作ることができる (吉島・大橋訳・編 2004)」

日本語の上級も、しっかりとした構成の詳細なテキストを作ることは必要である。しかし書き言葉である作文でその練習をすることは容易だが、スピーキングでそれを練習することは難しく、一番有効な方法はディベートだと言える。例えばプレゼンテーションの授業の場合、準備を周到に行い、前もって書かれた原稿を読んだとしても発表は成り立つ。それでは即興である程度の長さをもつテキストを作れるようになったとはいえない。また会話相手がいる会話練習の場合も、一人が長く話す必要は決してなく、一方が話せなくなる場合は他者が助け舟を出すことがで

きる。これでは一定の長さを持つテキストを話す練習とはならない。一方ディベートは複雑な話題について内容を理解し、1人が一定の時間を与えられ、根拠を示しながら、相手に分かりやすく意見を主張する。一定の長さのテキストを作る練習が行えると言える。

また経済協力開発機構 (OECD) が行ったプロジェクト成果で示された「キーコンピテンシー (主要能力)」の1つに「多様な社会グループにおける人間関係形成能力」がある。これは21世紀を生きるためにも、他者とうまくかかわり、一緒に働く能力が必要であるということである。その能力を磨くためにも、チーム内メンバーで協力し、相手チームを論破する必要があるディベートは有効であると考えられる。

日本語の授業でディベートはよく行われ、様々な実践報告がされている。井上 (2007) は台湾におけるディベート教育の概要について、野原・浅野 (2011) は、日本語学校におけるディベートの取り組みについて、高橋 (2015) は、ディベートの活動からレポート作成へ結び付けた指導法について報告している。内藤他 (2015) はディベートで取り扱うべき議題についての実践報告である。

語学の他に教養科目として、アクティブラーニングの実践を行っている研究も最近は増えている (辻 2017、呉他 2016)。

本稿は、日本語クラスでのディベートの実践報告であるが、ディベート本番だけでなく、ディベートの前の準備とディベート終了後のふりかえりの活動についても言及する。

2. 授業の概要

本実践を行ったのは、関西学院大学国際学部にて JAPANESE (LS) として開講されている日本語上級会話聴解クラスである。受講生は、日本語母語の学生から CEFR の C2 から B2 レベルの学生、9名であった。本科目は90分授業、週2回、14週のコースであり、28回中21回をディベートに充てた。コースの内容は表1のとおりである。

毎回の授業最後の5分はコメントシートを配布し、コメントを書いてもらうようにした。また、ディベートの前の準備の2回は、ディベートのために90分すべてを使うのではなく、発音練習、ニュースの聞きとり、新出語彙の解説などに時間を充てた。

3. 実践の流れと内容

本実践でディベートは5回行った。テーマは討論しやすい事項で、政治や経済、法律などさまざまな分野のものを取り扱うこととし、講師が選別した (表2参照)。

第1回目はディベートのテーマについて読解や聴解教材として導入し、賛成か反対かどちらかの立場にたって意見文を書くことを宿題とした。第2回目はそれをもってグループでディスカッションを行った。第3回目はディベート本番である。その後第4回目は CALL 教室でふりかえりを行った。ディベートについての説明を3.1で、ディベートのテーマ導入を3.2で、グループディスカッションを3.3で、ディベート本番を3.4で、ふりかえりを3.5で見ていく。3.6では意見文の評価について説明する。

表1 JAPANESE (LS) 上級クラスの内容構成

1	ディベートとは何か。ディベートについてのビデオ視聴
2	ディベートのテーマについて読解もしくは聴解
3	ディベートのテーマについて賛成派・反対派に分かれてディスカッション
4	ディベート
5	ディベートのふりかえり
6	ディベートのテーマについて読解もしくは聴解
7	ディベートのテーマについて賛成派・反対派に分かれてディスカッション
8	ディベート
9	ディベートのふりかえり
10	ディベートのテーマについて読解もしくは聴解
11	ディベートのテーマについて賛成派・反対派に分かれてディスカッション
12	ディベート
13	ディベートのふりかえり
14	ディベートのテーマについて読解もしくは聴解
15	ディベートのテーマについて賛成派・反対派に分かれてディスカッション
16	ディベート
17	ディベートのふりかえり
18	ディベートのテーマについて読解もしくは聴解
19	ディベートのテーマについて賛成派・反対派に分かれてディスカッション
20	ディベート
21	ディベートのふりかえり

表2 ディベートに用いたテーマ

1	小学生に携帯電話を持たせるべきか
2	死刑制度は廃止すべきか
3	サマータイムを導入すべきか
4	総理大臣を直接選挙で選ぶべきか
5	カジノを合法化すべきか

3.1 ディベートについての説明

第1回目の授業で、ディベートについて説明した。ディベートとディスカッションの違い、特に賛成か反対か立場を明確にすること、聞き手が分かるように論理的に話す必要があることを説明した。またディベートの流れ、立論、反駁、最終弁論が順番に1人でスピーチすること、最後に点数でどちらが勝ち負けか判定すること、そしてその審査基準についても解説した。その後ディベートをしているビデオと一緒に視聴し、ディベートの全体像を理解してもらった。

聞き手に分かりやすく説明するために必要なこと、例えば要点を最初に伝え、キーワードをうまく伝えること、また理由はナンバリングすると分かりやすいことなどを解説した。

3.2 ディベートのテーマの導入

テーマについて理解を深めるために、新聞記事を読んだりニュースを聞いたりした。例えば「死刑制度を廃止すべきか」というテーマのとき、ちょうど日本弁護士連合会が「人権擁護大会」で、死刑制度の廃止を求める宣言を採択したばかりであった。そこで、そのウェブニュースを取り上げ、死刑制度について理解を深めた。その上で、賛成グループか反対グループかに分かれ、それについての意見文を宿題とした。その際、論を立証するためのデータが多いほど相手を納得させることができるので、根拠となるデータを探してくるように説明した。

3.3 ディベートのテーマについてのディスカッション

賛成グループ、反対グループに分かれ、グループごとに個人の意見文を読み合った。そして、ディベート本番で、立論を組み立てる場合、いくつの根拠となるデータになるかをまとめるように指示した。またどのような反駁がくるかを予想して、それに対する反論を考える時間とした。

3.4 ディベート本番の活動

受講生たちを3グループに分けた。賛成グループ3名、反対グループ3名、評価グループ3名で、ディベートのテーマ4回ですべての人がそれぞれのグループを経験できるようにした。評価グループは1名が司会、それ以外はタイムキーパーとした。欠席者もいたので、評価が2名になる場合もあった。

ディベート本番の流れは表3で示す。立論、反駁、最終弁論は各1名が担当する。時間配分は表3のとおりである。2と4の質問については、グループ内の誰が質問しても誰が答えても構わないが、内容面の確認と不明な点を補足することを質問するように説明した。

ディベート本番はすべてICレコーダーで録音した。

採点基準は表4の項目で点数化し、評価グループと講師合計点数で勝ち負けを付けた。

受講者全員にフローチャートを配り、賛成グループ、反対グループの立論、反駁などのポイント、根拠となるデータ数などを書いてもらうようにした(図1参照)。

特に評価グループはあとでふりかえることができるように、フローチャートを書くよう指示した。

表3 ディベート本番の流れ

1	賛成グループ 立論	3分
2	反対グループからの質問	3分
3	反対グループ 立論	3分
4	賛成グループからの質問	3分
5	作戦タイム	5分
6	反対グループ 反駁	2分
7	賛成グループ 反駁	2分
8	作戦タイム	5分
9	反対グループ 最終弁論	3分
10	賛成グループ 最終弁論	3分

表4 採点基準 各5点満点 計35点

	賛成	反対
時間について（浪費、時間の余り）		
チームワーク（全員参加、リーダーシップ）		
発表態度（話し方、声の大きさ、パフォーマンス）		
立論の内容（論理的、説得力、妥当性）		
反駁の内容（論理的、説得力、妥当性）		
質問がよかったか		
最終弁論のまとめ度合い		
合計	点	点

点数の目安

非常によくできていた 5点 まあまあよくできていた 4点 普通 3点

あまりよくできていなかった 2点 全然よくなかった 1点

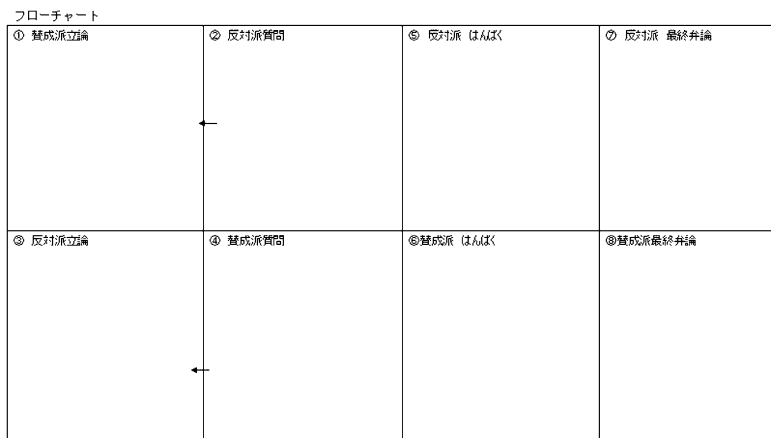


図1 ディベートのフローチャート

3.5 ディベートのふりかえり

ディベート終了後次のクラスは、CALL 教室で自分たちの討論をふりかえる時間を設けた。まず、テーマであった意見文をクラスメートとピアレスポンスし、お互い意見を出し、間違いを指摘し合い、教え合った。そしてそれを参考にして、書き直しを宿題とした。次に受講者は、ディベートを録音した音声ファイルを講師から受け取り、ふりかえりシートに記入する。音声配布とふりかえりシートの提出は、CALL 教室についている CALABO システムを利用した。ふりかえりシートには、自分の担当したところのよかった点、内容面で直すべき点、日本語で間違ってしまった点、次回気を付けることを書く。

3.6 ディベート後の意見文の評価

書き直した意見文の評価はループリックを用いた。ディベートについて説明した授業で、ループリック（表5参照）も説明した。

表5 意見文の評価

評価基準	目標以上に達成 (4点)	目標を達成 (3点)	目標達成まであと少 し(2点)	目標達成まで努力が 必要(1点)
自分の意見 の主張	自分の意見がはっきりとわかりやすく書いてある。理由もよくわかる。	自分の意見が書いてある。理由も書いてある。	自分の意見が書いてあるが、理由がわからない。	意見が何かまったくわからない。理由もわからない。
根拠となる データ	根拠となるデータがはっきりしている。それを読むと説得される。	根拠となるデータが書いてある。しかしそれを読んでもあまりわからない。	根拠となるデータが明らかではない。	データを書いていない。
ディベート とピアレス ポンス	ディベートとピアレスポンスで話したことがよく反映されていて、内容が濃い。	ディベートとピアレスポンスで話したことが書かれている。	ディベートで話されたことがあまり反映されていない。	ディベートで話されたことが全く反映されていない。
文法と表記	文法も漢字も表記もあやまりがない。	文法も漢字も表記もあやまりが少ない。	文法と漢字と表記のあやまりがあって、読みにくい。	文法と漢字と表記のあやまりが多すぎて、読めない。
レポートの 形式		レポートの形式を守っている。	間違っているところがある。	間違いだらけだ。

評価項目は意見の明確さ、根拠となるデータの提示、ディベートとピアレスポンスの効果、文法と表記の正確性、レポートの形式の5つで、4段階評価である。これに従って、ディベート後の意見文を評価した。

4. 総合的考察

ここでは、ディベート本番前に行った、ディベートのテーマについてのディスカッションについてを4.1で、ディベート本番の活動についてを4.2で、ディベートのふりかえりを4.3で、ディベート後の意見文についてを4.4で、受講生の感想についてを4.5で考察する。

4.1 ディベートのテーマについてのディスカッション

ディベートのテーマについてそれぞれが意見を出し合う時間であり、最初の作戦タイムだと言える。初回は意見文を十分準備してきて、ディスカッションも盛り上がったが、中盤から内容が難しくなったこともあって、沈黙の時間も多くなった。ホームページにある文章をコピーしてきて、漢字も読めず、意味をあまり理解しないまま根拠として意見文を書く受講生も出てきた。その場合、根拠をうまくまとめることができず結果的に意見を無視されることになった。その受講生には自分の言葉でまとめるように促した。

またディスカッションの時間に立論、反駁、最終弁論の担当を先に決めてしまい、自分の担当箇所だけ準備すればそれで満足する受講生が出てきてしまった。そのため、グループで根拠となるデータを補強しあい、助け合うことが少なくなってしまった。本番に勝つためには、しっかりとした準備が必要だということを伝えたが、話を盛り上げるためにも、活動シートを準備する必要があった。

それからコメントによると、ディベートのテーマによって関心の度合いは異なり、興味がない

テーマでは作文にしっかり取り組まない場合もあった。テーマを受講生に決めてもらってもよかつたかもしれない。

またディスカッション時欠席した受講生は、自動的に評価グループに入ってしまう。その場合、前準備をほとんどせず、ほかの受講生と準備時間に差が生じていた。

4.2 ディベート当日のスピーチについて

第1回目は、ディベートとは何かがやはりわかっていない受講生もあり、立論、反駁、最終弁論は協力してそれぞれが話せると思っていたようで混乱していた。しかし1度経験すると、流れは理解したようで、2回目以降、混乱はなかった。

中盤になると、自分が準備した意見文をそのまま読む受講生がいたため、相手に説得するため、語りかけるように話す必要があるとコメントした。内容も分からないインターネットの内容をそのままコピーして読んだ人は、立論の質問時に答えられず困っており、その後そういうことはしなかった。

評価グループを体験すると、ディベートを客観視することができ、立論、反駁がそれぞれどういう役割で、どういう発言をすれば効果的か理解できたように思う。

ただ評価グループである司会とタイムキーパーにはフローチャートを書くように指示したが、そうすると司会は次に進めること、タイムキーパーは時間を計ることをおろそかになってしまい、同時に2つすることは大変難しいことが分かった。フローチャートを簡単に書く技術を伝える時間も必要であった。ディベートについて説明する授業で、ディベートのビデオを視聴するだけでなく、それをそれぞれ聞きとって、フローチャートに書き込む練習を前もって行えばよかつたかもしれない。

ディベート後に講師の講評を行ったが、それぞれの役割の仕事ぶりやディベートの内容、評価などを気にしていると、的確に講評をするに行えない場合もある。うまく講評できるように講師自身も練習する必要がある。

4.3 ディベートのふりかえり

まず、宿題として出した意見文のピアレスポンスについて考察する。受講生の日本語レベルに差があったため、ピアレスポンス時、相手を書いた作文の漢字が読めず、ペアで時間に差が生じてしまうことを恐れ、レベルが同じようなペアを作っていた。毎回同じペアになっている組があった。そのため、最初は真面目に取り組んでいたが、中盤以降ピアレスポンスをきちんと行わないペアもあった。ピアレスポンスをして改訂したことを評価で取り上げている点、お互い指摘しあうことで、日本語力が高まることを、最初だけでなく何度も伝える必要があった。

次に、ディベートのふりかえりについて考察する。CALL教室を利用したので、受講生1人1人確実に音声を渡し、その場で音声を聞き、自分の日本語を聞く時間がとれた。音声ファイルなどはメールで送るには重く、クラウドにあげているものをダウンロードさせるようにしてもうまくダウンロードできない受講生が出てきたりするので、直接すぐに音声ファイルを受け渡せるCALL教室のシステムは有効であった。

こうやって録音したファイルを受け取って聞くことは、なかなか普段の生活では聞きにくい。

自分の声を聞くのが嫌だという受講生もいた。しかし自分で書いたものは残っているので、いつでもふりかえることができるのに対し、話したものは残っていないので、ふりかえりが難しい。本実践では、自分の日本語を聞いて、間違いに気がつくいい機会になった。ただ学習者にとって文法的な正確さについてはすぐに気づくのだが、構成面や表現はなかなか理解できず、自分で気が付くことはできなかった。そこで、講師が気づきを促す工夫が必要だと気づき、ディベートのスピーチを文字化し、フィードバックを行うようにした。

例えば、「総理大臣を直接選挙で選ぶべきか」の賛成グループの反駁で、直接選挙にするにしても、国民一人一人の責任が大きすぎることはないという理由を述べるとき、次のように言っていた。

なぜかという、それ、国民だから、それぐらいの負担もたないと、自分のためだから、だれかいい人か悪い人か自分で分かりますので。

(なぜかという、それは国民ですから、それぐらいの負担もたないといけません。自分のために、誰がいい人で誰が悪い人か分かる必要があります。)

ここでは、理由を表す「から」が2回、「ので」が1回使われている。この受講生は日常から複文を作るのに「から」や「ので」を使いすぎる傾向があった。それには、自分の録音した音声聞いても認識していなかった。そのため、文字化した資料を一緒に見ながら講師が分かりにくい部分を指し、この文は聞いていて分かりにくい、どういったほうがよかったか質問して、受講生に気づきを促した。

4.4 ディベート後の意見文

意見文はディベート前に書き、ディベート後に修正、ピアレスポンス後も修正と2回書き直すことになる。この修正作業に手を抜く受講生が中盤から見られた。

また根拠となるデータの提示とナンバリングをする重要性について説き、評価にも挙げているが、理解できず、根拠がはっきりしない意見文を書く受講生がいた。そのため、意見文のフォーマットを渡して、これに沿って書くように伝えた。ディベートに慣れていない初期の段階で導入すれば、相手に聞きやすいように伝える重要性がもっと理解しただろう。難しいテーマであっても、どうやって書き始めたらいいか分かったと思われる。

4.5 受講生の感想

全体を通してディベートは楽しいという受講生の意見が多く見られた。グループ内で協力し合い、勝ち負けが判定されるというゲーム性がやはり好評だったようだ。

最終弁論がとても上手な受講生がおり、自分が準備した意見文に、その場でなされた議論、反駁の反論を付け加えられていた。講評でほめたところ、彼女自身も自分は最終弁論を言うのが得意なようだと自信をつけていた。

反対に自分は上手に話せる期待が大きかったからか、実際は言葉が詰まって、言いたいことも伝えられず、愕然として憤怒してしまった受講生もいる。次の授業には落ち着いていたが、誰も

がリラックスして本番に臨める環境を整える必要があった。

また自分の意見と違うグループに入ったとき、理由が考えられずつまらないという意見も得られた。様々な立場に立って、視野を広げる重要性を伝えればよかった。

5. 今後の課題

以上、日本語授業のディベートの活動について報告し、それを考察した。

この授業を通して、自ら調査し、論理づけて整理し、相手を説得する意見文を構成するということは理解したと思われる。またふりかえり作業で、自分の日本語を内省し、意見文を何度も書き直すことで深い学びにつながったのではないだろうか。

ただ導入時にフローチャートの書き方の指導や意見文のフォーマットを渡すこと、中盤にはディスカッションシートを準備しておくことなど反省すべき点もあった。

ディベートは上級向けのスピーキングの練習をするのに有効であると思われるが、実際に受講生の日本語力が上がったかどうかは分からない。ディベート前後でスピーキングテストを受けてもらい、その結果を比較するなど、学力面での考察が必要である。これは今後の課題としたい。

参考文献

- 井上奈良彦 (2007) 「台湾における日本語ディベート教育の実践研究」『2006年度財団法人交流協会日台交流センター 日台研究支援事業報告書』
- 呉宣児・新井健一郎・謝志海・大沼久夫・張涓涛 (2016) 「ディベートを用いたアクティブラーニングの試み：国際コース1年前期「基礎演習」での取組」『共愛学園前橋国際大学論集』16：127-143
- 大塚裕子・森本郁代 (2011) 『話し合いトレーニング伝える力・聴く力・問う力を育てる自律型対話入門』ナカニシヤ出版
- 辻高明 (2017) 「教養教育におけるディベートの設計と実践」『秋田大学教養基礎教育研究年報』83-92
- 高橋純子 (2015) 「ディベートの効果と可能性：「日本語学習Ⅰ」の実践報告」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』30：299-307
- 内藤真理子・西村由美・竹内茜 (2015) 「ディベートの議論選びについての実践報告」『日本語教育方法研究会誌』22巻2号：32-33
- 永井涼子 (2009) 「初級におけるディベート準備授業の試み」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』24：85-95
- 西谷まり (2001) 「ディベート活動を通じた口頭表現の指導法」『一橋大学留学生センター紀要』4：57-73
- 野原ゆかり・浅野有里 (2011) 「プロセスに注目したディベート授業の可能性：日本語学校における試み」『言語文化と日本語教育』41：50-59
- 松本茂・河野哲也 (2015) 『大学生のための「読む・書く・プレゼン・ディベート」の方法改訂第二版』玉川大学出版部
- 吉島茂・大橋理枝(訳・編) (2004) 『外国語教育Ⅱ—外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社